

植物を追求して、 社会に貢献したい

は せ が わ か な 長谷川 佳菜 さん

農学部 生物資源科学科 (2017年3月卒)
横浜植木株式会社 勤務 (商品開発 ブリーダー)

1994年生まれ、山梨県立甲府西高等学校卒
趣味はキャンプ。好きな言葉は「戒驕戒躁」。



自然環境に魅力を感じて静大農学部へ

甲府の高校から静岡大学に進学した理由は、幼い頃から植物が好きで、農学部を目指していたからです。温暖で日照時間が長く、自然豊かな静岡は、作物を栽培する環境に恵まれ、とても魅力的だと思いました。実際に、実習や講義、卒業研究を通して、野菜、果樹、花卉などさまざまな植物を勉強することができました。

参加してよかった「海外フィールド研修」

所属した雑草学研究室では、イタドリという雑草を用いた伝統農法について、その優位性を調べる研究を行いました。歴代の先輩の研究を引き継ぐ研究室も多いと聞きますが、当時、雑草学研究室は創立2年目だったこともあり、一から新しいテーマに取り組むことができました。試行錯誤の日々で、自主性や思考力が鍛えられたように思います。2年生の時に海外フィールド研修に参加し、10日間ほどインドネシアで現地の農業を学びました。学生同士の交流やホームステイはとても印象に残っています。



インドネシアで現地の農業を学ぶ

植物の新品種を開発する仕事に就いて

就職先は、植物に直接触れられる職場、特に自らの手で新しい品種を生み出すブリーダー（育種家）という職業にとても魅力を感じて、今の会社に入りました。念願がかない、現在、ブリーダーとして商品開発の仕事をしています。開発というと、研究室の中にいるイメージが強

いかかもしれません。もちろん、調査や選抜などの仕事もありますが、各品目のブリーダーが主体となって担当作物の栽培を行います。播種から収穫、さらには次の世代の採種まで、植物の一生に携わることができるのは非常に興味深いです。

課外活動で出会った友人が宝物に

在学中の4年間、社交ダンス部に所属していました。3年生の時には部長を務めていましたので、部活の時間外も事務仕事が多く、特に学園祭準備期間や合宿の前は準備で忙しく、同期と協力しながら隙間の時間を有効活用して進めました。計画性をもって早めにコツコツと取り組む姿勢が身につく、仕事でも活かしています。また、農学祭実行委員会にも所属し、積極的に大学の課外活動に参加しました。部活との両立は大変でしたが、多くのことを学びましたし、何よりそこで出会った友人とは今でも良い関係が続いています。



4年間打ち込んだ社交ダンス

大学生活を謳歌しよう

学業、部活動、委員会活動、インドネシアへの海外フィールド研修、アルバイト、プライベートと充実した学生生活でした。大切な友人達とも出会うことができ、静岡大学に進学して本当に良かったと思っています。大学生は自由な時間が増えますし、高校生までと比べて、自分自身の選択によって圧倒的に自由に行動できると思います。その分自分の選択や行動に責任を持たなくてはなりません。自分自身が何をやりたいのか、将来のために何をすべきなのかをしっかりと考えて、限りある大学生活を謳歌してください。



メロンの収穫物調査中



大学での勉学が いまの私の基盤に

きぬ が さ た ろ う

衣笠 太郎 さん

人文学部 社会学科 (2012年3月卒)
秀明大学 学校教師学部 助教 (専任)

1988年生まれ、鳥取県立八頭高等学校
趣味は読書と野球観戦。
好きな言葉は「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である (E.H.カー)」。

歴史学を学びたくて、 教員と科目が豊富な静大へ

静大の人文学部 (現在の人文社会科学部) 社会学科には、西洋史・東洋史・日本史の専門家が揃っており、歴史学がまんべんなく学べることを魅力を感じて静大を選びました。人間学・社会学・文化人類学など人文学を広く学ぶ上で必要不可欠な分野も学べたことが研究の糧になっていると、研究者になった今、実感しています。

東日本大震災を機に、研究者を目指す

就職活動を始めた頃は、民間企業に、と思っていましたが、営利を追求する民間企業とのミスマッチを感じるようになり、2011年春、4年次になってから研究者志望へと変更しました。東日本大震災が発生し、就活が中断したときに、改めて自身の適性を見つめ直し、「社会の普遍的真理を追究したい」という思いが強くなっていったのです。その後、博士課程のある別の大学院へ進学し、研究者の道を進みました。



秀明大学で外国史概説や世界近現代史を担当

3～4年次は2つのゼミに所属

私の専門は近現代の中東欧史で、静大での幅広い勉学が基盤になっています。まず、初修外国語のドイツ語がドイツ近現代史の基礎を作ってくれました。2年次は歴史コースに所属し、3年次からは現代ドイツ史と古代ギリシア史について学ぶため、2つのゼミに所属しました。1つは世界近現代史ゼミで、岩井淳先生に西洋史家としての基礎を叩き込まれ、戸部健先生からは中国近現代史の面白さを教わりました。もう1つは世界比較文明史ゼミで、澤田典子先生と故重近啓樹先生が私の拙い発表に温かいコメントをくださったのを覚えています。今でも先生方とは、歴史研究者の先輩・後輩として交流が続いています。

学生時代の仲間は今も支えに

在学中は、片山寮という学生寮に住んでいて、それが日常生活のほぼ全てでした。4人部屋での濃密な集団生活を送っており、サークルも寮内の野球サークルという浸りぶりでした。何より良かったのは、同期の仲間ができたこと。今も機会があるごとに話をし、さまざまな悩みも晴れます。大学生活では、高校までと違い、日本各地・世界各国から進学してくるので、それだけ自分の世界も広がります。学内・学外を問わず、多くの人と知り合うことができるので、そこで築く人間関係が人生を豊かにしてくれて、私の財産になっています。

想定外!?「教育活動」に大きな喜び

大学教員として働く毎日に大きなやりがいを感じています。研究活動や執筆活動は当然ですが、想定外に手ごたえを感じているのが教育活動です。講義やゼミの準備には多大な労力と時間がかかりますが、学生たちが熱心に話を聞いてくれる姿を見ると、とても嬉しい気持ちになります。学生たちには学術をより深く学んで専門性を身につけてほしいと思いながら教えています。私が専門とする歴史学は、実は情報リテラシーに直結する学問分野でもあり、情報化の時代に私生活でも活かされる場面が増えているのを、私自身日々感じています。後輩の皆さんにも同じように「人生の基軸となる専門性」の獲得を、ぜひ目指してほしいです。



自著「旧ドイツ領全史」(2020年刊行)を手に